第3号

現地支援委員会ニュースレター

# 福島チーム

○福島旭町教会 ○あゆみの家教会 ○郡山コスモス通り教会

## 緑ヶ丘仮設住宅でコンサート

沖縄から、賛美のチーム「Inside Story Band」が来てくださり、前日の郡山コスモス通り教会でのコンサートに引き続き、翌 12 月 14 日、緑ヶ丘仮設住宅にて、青空市場と共にコンサートを開くことができました。前日、クリスマスプレゼントの引換券と青空市場のご案内を配りに行きましたが、とても寒い日で、手がかじかんできました。コンサートは会場の都合で、外で行う予定ですが「さむいだろうなあ。みんな風邪引かないだろうか…」そんな不安がよぎります。祈るしかありませんでした。

当日、ホカホカカイロとクラムチャウダーを用意し、寒ければコンサートの時間を短縮することも覚悟して出かけました。会場として予定されている野外には手作りのベンチがたくさん並べられています。マッサージと手もみ、そして、カフェは寒いだろうから集会場の中で行う予定で準備をしておりました。ところが、開始の時間に近づくにつれ、どんどん気温があがり、ぽかぽか陽気になりました。なんだか心もからだもほっこりするような天気になり、集会場の中にいるのがもったいない状況になりました。外ではすてきなクリスマスソングが聞こえてきます。急遽、マッサージも手もみもカフェも外で行うことになり、なんだかとってもすてきな野外コンサートになりました。犬を飼っている方たちは、犬と一緒に歌声に耳を傾け、時には口ずさみ、あちこちで笑顔がこぼれます。ゆったりとした時間が流れていきました。

ところが、手もみをしていると、何人もの方が「もう今日で最後かい。もうきてくれないのか。」と悲しい顔で遠慮がちに聞いてこられます。とうとう「もうおわかれなのかい。」って泣きながらしがみついてくる方が続出。「また来月、くるよ。」と応えると、「今日で最後と書いてある。」とお配りした案内文を見せてくださいました。その紙に「青空市場は今日で最後」と書いてあるのを見てもう今日で最後の訪問と勘違いされたようでした。「また来るよ。」とさらにお伝えしても涙があふれておられるので鈴木先生に涙の原因を話し、「また来月来ます！」とアナウンスをしていただきました。するとほっとした顔で「待ってるよ、待ってるよ。」と繰り返すおばちゃんたちの声に思わず、胸キュン。涙がこぼれます。こんなに待っていてくださるおばちゃんたちのその涙は、神様から私たちへの最高のクリスマスプレゼントでした。来月は、あゆみの家教会の女性会が緑ヶ丘仮設住宅支援のために、郷土料理の「三五八漬け」※を作ってくださることになり、それを持って行きます。あゆみの家教会の女性会の方々が作ってくださるこの三五八漬けは最高においしく、使われている糀は免疫力を高める作用があり、放射能の数値が高い郡山にはうってつけの食べ物です。喜んでくださること間違いなし！1 月の訪問日が楽しみです。（現地スタッフ：金子千嘉世）

※三五八漬け

塩、糀、米を三、五、八の割合で仕込んだ漬け床で漬けたもの。昔、余ったごはんにたまたま糀を加えてみたことからうまれたとのこと。きゅうり、かぶ、大根、にんじん、こなす。鮭やイカなどでも応用できる。ぬか漬けのように毎日かき回す手間がいらず、一夜でおいしく漬かる漬け物。福島県の会津地方の郷土料理。

**祈りの課題**

- 津波や原発事故のために県内外に避難している方たちが守られますように。
- 原発事故の真の解決のために。
- 福島県内に生活している住民の健康が放射線から守られますように。

## 全国の皆様のお祈りとご支援に心から感謝して

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こり、被災地全体が震災のダメージに苦しみ混乱している中、福島県では原発事故が起きました。福島県に住む私たちが、事故当時、何よりも不安だったのは、自分が住んでいる地域で測定される放射線量で自分や子どもの身体にどのような影響があるのか、正しい情報が得られなかったことです。

そんな不安の中、郡山コスモス通り教会のメンバー3 組の母子で、連盟本部に一時避難させていただいたことは、本当に感謝なことでした。事故から約一週間、放射線の影響を心配して子どもと共に外に出ることができない日々が続きましたから、浦和に着いてからの十日間、のびのび過ごせる幸せをかみしめました。

避難した私たちを満たしてくれたのは、物理的に外で過ごせるという開放感だけではありません。避難した子どもたちのために訪問してくださり、お祈りと励ましをいただいたり、礼拝や祈祷会にお邪魔させていただいたり、「信仰によって繋がる人によって支えられている」という喜びをたくさん味わうことができました。

避難中は、子どもたちにのびのび過ごす時間を確保し、多くの方と楽しい活動をして、暗かった気持ちが晴れていく一方で、毎日現地の放射線量をニュースで調べ、なかなか下がらない放射線の数値を心配して過ごしました。避難先に、子どもたちの通う小学校から「通常より少し遅れるものの、4 月に新学期開始」との知らせを受け、3 月 31 日、私たちは郡山に帰ることにしました。「放射線量が急激に上がることがないなら、これからも郡山の地で子どもを育てよう、その代わり身体的な影響が最小限で済むよう、親としてできることを精一杯やろう」一時避難するしないに関わらず、郡山に留まる者として、このような気持ちで、郡山での生活をしています。

一時避難のときだけでなく、各教会から、子どもたちが放射線の影響を受けることを心配し、子どもが少しでも放射線量の低い場所で過ごす時間をつくろうと、働きかけてくださっています。2011 年は、ふじみ野教会での夏期学校、大富教会・南光台教会でのお泊り会など、さまざまな場に招いていただきました。子どもプログラムも用意され、子どもたちがただ楽しいだけでなく信仰に満ちた時間を過ごさせていただいたことを、本当に感謝しております。信仰でつながる兄弟姉妹だからこその、このようなはたらきに支えられ、思うように外で過ごせない不自由な生活となった郡山に戻ってくるときも、子どもたちは元気いっぱいです。子どもが元気で過ごせることで、私たち親も、本当に救われる思いになるのです。ほかにも、郡山の水や食べ物を心配して、少しでも安心できるものをと、物質的にも本当に多くの支援をいただきました。自分たちでも、少しでも放射線の影響を減らすため、2011 年 9 月の教会修養会は宮城県の鳴子温泉に出かけたり、日々の生活で放射線から身を守る手立てをできるだけ実践したりして、郡山で暮らす時間を安心して過ごせるよう、工夫しています。

郡山市の子どもたちは、2011 年 10 月から、被曝量を測定するためのガラスバッジを携帯して生活しています。一定期間携帯した後、学校を通して検査機関に提出し、累積した線量が保護者に通知されます。10 月～11 月に測定した線量については、すでに通知されました。10 月以前の、もっと線量の高い時期を郡山で過ごしていますので、実際の被曝量は通知された線量より高いのではないかと予想しています。当時の正確な被曝量は、今となっては分からないので、あくまで予想です。不安は完全にはぬぐえません。それでも、最も線量が高かったであろう事故直後の十日間に一時避難できたことで、避難した子どもたちの被曝量は確実に少なくなっているだろうと思います。数値的なデータも現実の出来事と受け止め、これからも子どもの健康を守るため、親としてできるだけのことにしっかり取り組もうと思わされます。

震災・事故から 10 ヶ月以上が過ぎました。不安な中で子育てする私たちを覚えて、本当に多くの祈りがあり、具体的な助けが与えられ、励まされてきました。どんなときでも恵みを与えてくださる主に感謝し、より頼んで、これからも歩んでいきたいと思います。（郡山コスモス通りキリスト教会：齋藤はるか）

◇郡山教会前の除染作業が終了しました

## 病棟での対話

私は昨年の 6 月頃から急に体調が悪化して 7 月末から約 2 ヶ月間、病院に入院していました。そのため被災地支援の働きへの参与が遅れてしまいました。しかし、そのために病棟内で浪江町から原発事故のために福島市に避難して来られた方と対話する機会が与えられました。

その方の二つの言葉が心に残っています。その方は言われました。「国は私たちが帰れるのか帰れないのかはっきりしてほしいです。」おっしゃるとおりだと思いました。その方はまた、このように言われました。「電気がなくなると困るから原発は必要ですよね。」この発言に対しては、おっしゃるとおりですと言うわけにはいきません。その方に対してではなく国や東京電力やマスコミに対して怒りが込み上げてきて体全体が怒りで震えそうになりました。その方は、こんなにひどい目に会ってもなお、原発は必要だという嘘に騙されているのです。騙されている彼女に対してではなく騙している人たちに対して深い憤りを感じます。嘘が嘘であることが一人でも多くの人たちに明らかになることを願ってやみません。最後に良書を一冊、紹介させていただきます。

「原発がなくても電力は足りる！」（監修 飯田哲也／ 宝島社）。（あゆみの家キリスト教会：渡辺政友）

**◆今号に掲載していない被災県内の教会・伝道所の様子も、次号以降、順次お知らせしていきます。**

『現地支援委員会ニュースレター』第 3 号　2012 年 1 月発行　◆編集：日本バプテスト連盟災害対策本部現地支援委員会　◆発行人：加藤　誠